

こんにちは♪ 先日、芥川賞と直木賞の発表がありました！ 芥川賞は、井戸川射子^{いこ}さんの『この世の喜びよ』と佐藤厚志^{さとし}さんの『荒地の家族』が受賞！ 直木賞は、千早茜^{ちはやあかね}さんの『しろがねの葉』と小川哲^{さとし}さんの『地図と拳』が受賞！ と両賞ともにダブル受賞となりました！ 芥川賞はともかく、直木賞はせーやさんイチオシの『しろがねの葉』が選ばれてゴキゲンです♪ 『地図と拳』は、本屋大賞との差異を見せつけたというところでしょうか。今号の図書館通信では、芥川賞受賞作と直木賞受賞作、直木賞のノミネート作、さらには本屋大賞ノミネート作も紹介します！

芥川賞受賞作！

『この世の喜びよ』 井戸川射子^{いこ}

「あなたはここでなら目を閉じていても歩ける」。著者は現役高校国語教師！ 最初から最後まで主人公が「あなた」で語られる二人称の文体なのは、育児休業中の自分が「しんどくて、誰かに見守っていてほしかったから」。毎日通ってお世話になった大きなショッピングセンターが舞台です。そこにさえ行けばなんとかなると、子育ての救いの場だった。幼い娘たちと通いつめたショッピングセンターの喪服売り場で、いまあなたは働いている。娘たちの手が離れたあなたは、毎日のようにフードコートにひとりですっと座りつづけている少女が気になって…。

『荒地の家族』 佐藤厚志

こちらは書店員。「この受賞が、震災が忘れられることへのささやかな抵抗になるといいな」。東日本大震災から十年が経って書かれた、「その後」の物語。宮城県の海沿いの亘理町^{わたり}でひとりで造園業を営む四十歳の祐治は、ひとり親方として独立したとたん東日本大震災に見舞われ、商売道具のすべてが詰まった倉庫と2トントラックを一度に失った。妻の晴海^{はるみ}は震災後に体調不良が常態となり、二年後にインフルエンザの高熱により、ひとり息子の啓太を残して亡くなってしまふ。その後、別の女性と再婚するが、流産したのをきっかけに去られ、いまでは直接会うこともかなわない身だ。晴海を喪ったあと、祐治はひたすら仕事に没頭したが、あるとき突然糸が切れたようになってしまったことがあった。人の一生に絶望したのだった…。

直木賞受賞作！

☆『しろがねの葉』 千早 茜

タイトルの「しろがねの葉」とは、^{しろがね}銀の溶けた水を吸い上げて銀の行き渡った葉脈がきらめく葉のこと。「こんなきれいなものがあるのか」「目にすれば、狂れるぞ」。貴重な銀のありかを知らせてくれます。戦国時代の銀山が舞台。銀を掘るために無数に穿たれた穴、間歩。その闇の暗さが描かれます。銀山のおなごは三たび夫を持つと言われます。長いこと潜れば石粉を吸って肺を病む間歩のなかでの過酷な労働が、男たちを早死にさせるのです。夜目が利き、暗闇を怖がらない子どもだったウメは、田を捨て逃げ出した両親とはぐれ、銀を採って人々が暮らす石銀集落で「銀の気が視えると謳われた山師」喜兵衛に拾われる。喜兵衛に間歩を見せられたウメは、目を凝らしても、凝らしても、見えない真実の闇を知り、初めて闇を怖ろしいと感じるのだった。喜兵衛に面白がられ、銀山の知識と秘められた鉱脈のありかまで授けられたウメは、女だてらに間歩で働き出す。ウメにとって喜兵衛は、親代わりであり、師匠であり、初めて愛した男でもあった。しかし、時代が徳川の世となり、喜兵衛は去ってしまうのだった。庇護者を失って銀の山に投げ出されたウメは、ひとりで生きていくための選択をする…。

☆『地図と拳』 小川 哲

山田風太郎賞も受賞！ 満州を語らずして、「あの戦争」は語れない。日本がなぜ無謀とも言える先の大戦に突き進んだのか。満州を描くことで、著者は戦争に至る構造を明らかにします。満州は満州でも、幻想の満州、架空の都市を語ることによって。物語は日露戦争前夜、1899年に始まります。ロシアの南下を警戒する日本から送り込まれた密偵の高木少尉と通訳の細川は、松花江の船上で「燃える土」があるという土地の噂を耳にする。燃える土とは石炭のことであり、ロシアもまだ気づいていない貴重な資源だ。その土地は「李家鎮」として栄えることになるのだが、小説はその長い長い物語を語る。タイトルの「地図」とは、国家。国家とは歴史や文化や理念といった抽象的なものの総体だが、それを具体的な形にしたものこそ地図なのである。その地図を作成するために「拳」つまり戦争が行われるのだ。「君は満州という白紙の地図に、夢を書きこむ」。まるっきり辞典のような厚さですが w、バツグンに面白い！ 驚くべき高密度で知もエンタも凝縮！ この本を読むのは「体験」！ 「失敗の歴史は、当時の人々が無能だったからでも愚かだったからでもない」。

直木賞ノミネート作！

『^{なんじ}汝、^{なざら}星のごとく』 凧良ゆう

王様のブランチ BOOK 大賞、紀伊國屋書店が選ぶ「キノベス！2023」第1位に！本屋大賞受賞『**流浪の月**』の凧良さんの本気の恋愛小説！舞台は瀬戸内の小さな島。愛人のもとに父親が去って行ってしまった^{あきみ}暁美。生まれてすぐに父親を亡くし、一時たりとも男なしでは生きられない母親に育てられた^{かい}權。「普通ではない」親に振り回され、苦しんできた二人は高3で出会い、同じ孤独を分け合える恋人になった。二人はともに島を出ることを望んでいたが、權が在学中に雑誌連載を決めマンガ家としての将来を切り開いて東京へ行こうとする一方で、暁美は父親の愛人の家に火をつけようとするところまで追い詰められてしまった母親を見捨てることができず、島に残ることになった。東京で夢を叶えてプロのマンガ家になり、作品がヒットしてちやほやされる權。両親が離婚し、経済的な不安から高卒で地元の旧態依然の会社に就職した暁美。対等だったはずの関係に生じた不均衡。暁美は、權に女の影を見、自分に退屈していることに気づく。自分に価値を見いだせず、侮られる程度でしかない自分が悔しい。本当に相手のことだけを愛していた二人なのに、すれ違ってしまう…。

『**光のところにいてね**』 一穂ミチ

「私たちは全然違って、だからお互いが必要だった」。『**スモールワールドズ**』著者による最高のシスターフッド小説！幼稚園から大学までエスカレーター式のお嬢さま私立女子小学校に通う^{ゆず}結珠は、自分の一挙一動に目を光らせる母に連れられた団地で、そこで暮らす同学年の少女・^{かのん}果遠と出会い仲よしになる。母親がそこに通うようになり部屋を訪れているあいだ結珠は一人にされるので、その時間だけ遊ぶことができるのだ。二人は何もかもまるっきり違っていたけれど、母親に束縛されている点だけはおなじだった。そんな二人はお互いのことが大好きになるのだった。「そこの、光のところにいてね」。死んでしまったインコを埋めようとしてスコップを借りに行った果遠に結珠は陽だまりのところで待っているよう指示されるが約束を守ることができず、二度と母親がそこを訪れることがなくなってしまったので、そのまま結珠は果遠に会えなくなってしまう。ところが、高等部に進学した結珠は、外部からの新入生のなかに、男の子みtainなベリーショートの髪型になってあか抜けた果遠を発見する。果遠は入学金も授業料も免除で返済不要の奨学金ももらえる特待生となって、結珠と同じ学校に入ったのだった…。

『クロコダイル・ティアーズ』 しずく いしゅうすけ 粟井脩介

タイトルは、「嘘泣き」のこと。英語では、「ワニの涙」が嘘泣きなのだそうです。ワニが獲物を捕食するときに涙を流すことにちなんているのだそうです。うかつに泣いているワニに近づくと、食べられてしまいます。老舗の陶磁器店を営む熟年の貞彦は、近くに住む息子・康平に店を任せられるようになり、その妻・想代子そよこに男の子の孫もできて、ちよくちよく来る孫の顔を眺めながらゆくゆくは安泰だと幸福な日々を満喫していた。ところが、康平は想代子の元交際相手に刺殺されてしまう。被告となった男は、懲役十七年の判決が下されたあとで、「俺は別に逆恨みとかそういう理由でやったんじゃない。想代子と会ったとき、彼女から頼まれたんですよ。旦那のDVがきつくて、毎日が地獄だって。自由になったら、俺とよりを戻したいって」などと爆弾発言をするのだった。でまかせか。貞彦は想代子を信じたいと思うが、妻は想代子を疑ってかかるのだった…。

本屋大賞ノミネート作！

芥川賞・直木賞受賞作発表の翌日に、**本屋大賞**のノミネート作も発表されました！選ばれたのは、以下の十作です。いかにも本屋大賞なラインナップですよ！もちろん日川高図書館ではもれなくすべて入れていましたよ！初めの2作は、先に紹介したように、直木賞候補にもノミネートされた作品です。今回の最有力作品は**青山美智子**さんの『月の立つ林で』でしょう。『お探し物は図書室まで』と『赤と青とエスキース』で2年連続惜しくも2位に選ばれ、今度こそは！と期待されています。

『汝、星のごとく』 凧良ゆう
『光のところにいてね』 一穂ミチ
『月の立つ林で』 青山美智子
『川のほとりに立つ者は』 寺地はるな
『宙ごはん』 町田そのこ
『君のクイズ』 小川 哲
『方舟』 夕木春央
『#真相をお話しします』 結城真一郎
『爆弾』 呉 勝浩
『ラブカは静かに弓を持つ』 安壇美緒

———— 「あそこには、夢が眠っているね」「え、なんの話さ？」では、図書館で。